

# SEFI レポート Vol.6

## SEFI バスツアー「紅葉の見沼たんぼと浦和のうなぎ」同行記



取材日時 2019年11月26日(火) 13:30~19:30  
取材場所 埼玉県さいたま市  
案内者 見沼たんぼ地域ガイドクラブ 大神代表、山鹿様

本ツアーは、東京都心から20~30km圏内に位置し、約1,260haという広大な面積を持つ、首都圏に残された貴重な大規模緑地空間である見沼たんぼとその周辺に由来した「浦和の鰻」を食すことで、古い歴史を紐解きながら、うなぎ文化の一端を実際に体験することを目的としたエコツアーです。

今回のツアーで回った全体の行程と場所を以下の図面に示します。



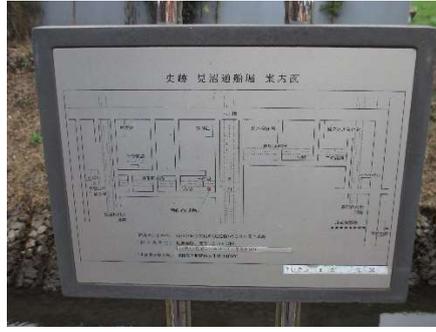
図面引用：見沼たんぼ 見どころガイド(さいたま市作成)

以下、現地で紹介された内容とともに、資料で各所についてももう少し詳しい内容を示します。

### (1) NO.1：通舟堀（西関～鈴木家～芝川～東関）

#### ・「通船堀」

見沼通船堀は、開門（こうもん）式の運河です。開門式運河としては、世界的にはパナマ運河（パナマ



共和国)が有名ですが、通船堀はパナマ運河が開通する1914年より約180年ほど前に開通した運河です。江戸八代将軍の徳川吉宗が、幕府財政再建のために新田開発の奨励の目的で見沼代用水路を紀州の井沢弥惣兵衛為永(いざわやそべえためなが)に命じて作らせたもので、用水路の開削は1628年に完成し、その3年後に見沼代用水路縁辺の村々と江戸を結ぶため東西の代用水路と芝川を結ぶ運河を開削。代用水路に対して、芝川の水位が3m低かったため、その途中に2か所の閘門を設け、水路を調節しながら船を通したとされています。

・「鈴木家」(右写真)

鈴木家は高田家とともに井沢弥惣兵衛為永に従って見沼新田開発に参加しています。その貢献により鈴木文平と兄の高田茂右衛門の二人に、見沼通船堀の差配権が与えられたようで、神田花房町に通船屋敷が設置され、川口宿、八丁堀、新染谷村等の6か所の出張所で通船会所差配が行われたそうです。

この住宅は、見沼通船堀の船割利業務を担っていた役宅として貴重な建物として国の指定文化財になっています。



・石積護岸

直接通船堀に関する話題ではないですが、ツアー中にうなぎに関するヒントを見ることができたので、写真とともに記載します。右の写真に示すように、通船堀の水路には、石積の護岸が採用されていました。石積は斜面だけでなく、水路の底面にも設置されて



おり、やはり多自然保護に対する考えを取り込んでいるのではないかと思います(引用資料①、②)

(2) NO.2: 木曾呂富士塚~第1調節池

・「木曾呂富士塚」

見沼通船堀沿いに東に進んだ突き当りにある小さな森に「木曾呂富士塚」があります。富士塚は、江戸時代に富士山信仰が盛んであった頃に、富士山の形を模して造られた小塚です。1800年に造られた本塚は埼玉県で最古のもので、国の有形文化財に指定されています。

・「芝川第1調節池」

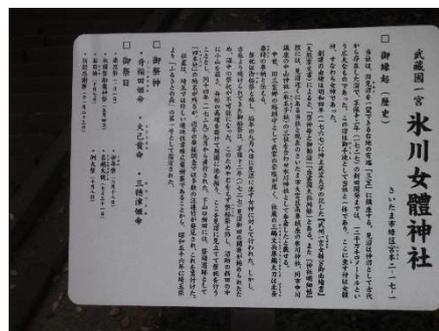
さいたま市緑区から川口市に至る広大なエリアに芝川第1調節池があります。昭和33年9月の狩野川台風により、見沼田んぼ全域が湛水し下流域の川口市市街地の大半が浸水したという惨事があり、それ以後、治水上の観点から開発抑制策が行われるようになり、同時に芝川の洪水防止の目的に調節池が

作られました。第1調節池は、面積が両岸合わせて92.3ha、最大貯水量は東京ドームの約4倍の550万m<sup>3</sup>で、左岸は完成し、右岸はまだ工事中です。第2～6調節池は計画中的とのことです。以下の真ん中の写真の向こう岸で重機が稼働しているところが右岸の工事中箇所です。参加者がガイドの方の説明を真剣に聞いている様子も伺えます。(引用資料①、②)



### (3) NO.3: 氷川女體神社

・この神社は、見沼田んぼを見下ろす高台に立つ古社です。1667年(寛文7年)に造営されたとのこと。氷川神社(さいたま市大宮区)、氷川女體神社、中山神社(さいたま市見沼区)の三社は一直線上にあり、かつ御祭神がそれぞれ須佐之男命(すさのおのみこと)・奇稲田姫命(くしなだひめのみこと)・大己貴命(おおなむとのみこと)で、「夫・妻・子」の関係にあることから、この三つの神社は「三社一体」の関係にあるといわれているそうです。とくに、氷川女體神社は見沼の信仰のルーツを知るうえで大変重要な社と考えられており、多くの文化財もあるそうです。(引用資料①)



### (4) NO.4: トラスト1号池

・ここは、緑のトラスト保全1号池と呼ばれ、埼玉県内の自然や歴史的な環境を県民共有の財産として寄付を募って永く保全しようとする活動「緑のトラスト運動」によって1990年度～2000年度に最初に取得された場所です。見沼代用水東縁に面していて、面積11,336m<sup>2</sup>の斜面林は、見沼田んぼ原風景の一つと言える場所だそうです。ここで、ガイドさんから改めて通船堀の閘門式水門の仕組みの説明がありました。(引用資料①、②)



## (5) 浦和のうなぎ

・江戸八代将軍徳川吉宗の時代には、現在のさいたま市の他、上尾市、川口市、草加市、越谷市の各一部を含む 210 町村が紀州藩の鷹場とされていたそうです。

紀州鷹場の鳥見役（鷹場の現地役人）を務めた會田家の記録によると、紀州徳川家への献上品として、うなぎが記録されており、それらは見沼新田から大門宿に集められたそうです。中山道浦和宿の鰻屋は有名ですが、會田家の記録の中に見沼新田周辺のうなぎが浦和宿に運ばれたことを示す記録もあると言われています。

当時、江戸前とは深川など江戸沿岸付近で取れるうなぎを指し評判が高かったそうですが、それ以外の場所で取れ江戸に出荷されたうなぎは、「旅鰻」と呼んで区別されていたようです。したがって、さいたま市域でとれるうなぎも、この旅鰻ということになるのでしょうか。（引用資料②、③）

### ・うなぎ料理店「幸楽園」での食事会

エコツアーの締めくくりに、さいたま市南区にあるうなぎ料理店「幸楽園」にて、うなぎ料理の会食を行いました。料理はもちろん「うな重」です。写真にあるように、皆さん美味しいものを目の前にすると、微笑みが出ます。

会食では、SEFI の三井代表から、ツアー参加への感謝の気持ちと、この会での取り組みの紹介がありました。その後、引き続き食事しながら、参加者全員が一人ずつ自己紹介や自社の取り組み等の紹介などをする方もおり、皆でうなぎの保全の大切さとともに、SEFI のコンセプトでもある“うなぎを守りながら食文化を絶やさない世の中にしたい”との思いを共感いただいたと思っています。



## ★後記

今回、SEFI としては初のエコツアー開催であり、まずは参加者が集まるかどうかの心配から始まりましたが、お陰様で SEFI メンバーを含め全員で 10 名の参加者があり、皆様のご協力のおかげにて無事に予定された見学会を終えることができました。「紅葉の見沼田んぼと浦和のうなぎ」と銘打って実施したものの、時期的には少し紅葉も終わりに近かったですが、見沼田んぼ周辺に残された自然環境の一端を垣間見ることができたと思います。見学に当たっては、ご案内をいただいた「見沼田んぼ地域ガイドクラブ」の大神代表と山鹿様による丁寧な説明で、大変わかりやすかったと思っています。この場を借りまして、改めまして御礼を申し上げます。次回以降、また SEFI の活動に関連したツアーや講演会等も実施していきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

### <参考資料>

- ① 見沼田んぼ 見どころガイド：さいたま市作成
- ② 当日配布資料「ゲスト用資料」：見沼田んぼ地域ガイドクラブ 大神代表及び山鹿氏作成
- ③ 「あかんさす」：さいたま市立浦和博物館館報、VOL.45-1, 45-2

(門倉伸行)